

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

“A Good Hater” : 禁酒物語作家Lucius M. Sargent

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2025-03-17 キーワード (Ja): 禁酒物語, ルシアス・サージェント, 『禁酒物語集』 キーワード (En): 作成者: 森岡, 裕一 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/0002000316

“A Good Hater”

— 禁酒物語作家Lucius M. Sargent —

森 岡 裕 一

要 旨

19世紀アメリカ禁酒物語の一翼をになったルシアス・サージェントは、同時代のT.S.アーサーと比べて認知度が低い。その理由の最たるものは、彼が長編物語を書けなかったことにある。エッセイや評伝では長編を多く書き残しているが、こと禁酒物語については、短篇集一作しか残していない。しかも、教訓調の文体や、タイトルと中身の齟齬など、長編を支える構想力に問題があり、そのことを作家自身が自覚していて、そのためオムニバス形式を多用するなど工夫の跡が見られる。テーマの扱いに関しても、しばしば視点のずれが見られ、物語の完成度に問題がある。くわえて、その口調の激しさも特徴的だ。学生時代から権威に反抗する態度が一貫しており、なにかと論争を挑み、ことに権力者の欺瞞を激しく攻撃する姿勢は、一部の批評家のあいだで、彼を“A Good Hater”と呼ぶにいたっている。

キーワード：禁酒物語、ルシアス・サージェント、『禁酒物語集』

19世紀アメリカ禁酒物語といえば、『酒場での十夜』（1854）の作者、T.S.アーサー（T・S・Arthur）の名がまずあげられる。だが、アーサーと同時代のもう一人の禁酒物語作家ルシアス・M・サージェント（Lucius M. Sargent）についてはどうであろうか。むろん、サージェントが全く無視されているわけではない。20世紀初頭までのアメリカの書籍受容史研究の古典ともいえる『ポピュラー・ブック』（*The Popular Book*, 1950）を書いたジェイムズ・ハート（James Hart）は、もっとも人口に膾炙した禁酒物語作家の一人にサージェントをあげている（109）。また、21の禁酒物語を集めたサージェントの短編集『禁酒物語集』（*Temperance Tales*, 1848）が、そのジャンルの古典として研究書で言及されることも稀ではない。ところが、両者のあいだで一般的な知名度に圧倒的な差があることは否めない。網羅的な『ケンブリッジ版アメリカ文学史』（*The Cambridge History of American Literature*, 1995）をはじめとする主だった文学史では、アーサーに関する言及はあるが、サージェントについては皆無である。酒とアメリカ文化を扱った通史の代表格『アメリカにおける飲酒』（*Drinking in America*, 1987）もアーサーのみを取りあげている。おそらく、その間の事情は、サージェントの『禁酒物語集』に一定の評価を与えつつ「1854年の『酒場での十夜』登場を機にアーサーが禁酒物語

作家のトップに躍り出て、以後その地位を保持した」(ファーマス、126)と評した『故・酒悪魔王の生涯とその時代』(*The Life and Times of the Late Demon Rum*, 1965)の記述に尽きるのだろう。

では、いったいその差はどこから生じているのか。もちろん、アーサーが短編にくわえて、多くの長編禁酒物語を書いたのに対し、サージェントの禁酒作品は『禁酒物語集』のみだという点がまずある。サージェントは長編のエッセイや伝記を書いており、長いものが書けなかったわけではない。ただ、ことフィクションとして物語ることに対する根本的な姿勢に関して問題があるのではないか。つまり、長編物語執筆に必要な資質がサージェントには欠けていたのではないかという問いが浮上するのである。そこで以下、彼は長編の禁酒物語を書かなかったのではなく、むしろ書けなかったのではないかと仮説をもとに、本国でもほとんど論じられることのない禁酒物語作家サージェントの物書きとしての特異性の一端を明らかにすることが本論の目的である。

禁酒物語を材料にする以上、まず作家自身の禁酒観をみておく必要がある。それには、『禁酒改良の現状に関するケイレブ・ステットソンへの手紙』(*Letter, On The State of The Temperance Reform, To Caleb Stetson*, 1836)が恰好の資料である。「禁酒」を表す原語 *temperance* が本来意味するところは「節酒」であり、具体的にはブランデー、ウイスキーなど蒸留酒はだめだが、ワイン等の醸造酒はよしとする考え方が根本にあった。したがって多くの禁酒家も適量のワインの飲酒は健康の為にむしろ推奨したほどである。ところが、それは誤りだとサージェントは言う。「ワインを主とする醸造酒はいにしへのノアの時代より国を滅ぼす酩酊の源」(12-13)であり、医者や聖職者によるワインは栄養価を高め健康を増進するなどという言説は「まったくもって絶対的な誤りだ」(15)と断言している。禁酒運動は飲酒者を根絶するのが目的であり、それには酒の種類は関係がない。また、「いかなる人の力をもってしても、ひとたびワインが飲まれると、適度な範囲内に飲酒をおさめることなど不可能だ」(33)とも述べる。「アルコールは腐敗と分解の産物であり、有機体の崩壊から生じている。発酵はそのプロセスなのだ」(36)というサージェントは、つまり、全面禁酒主義者なのである。

そうした禁酒観に基づく作品を集めたものが『禁酒物語集』だが、短編集を構成する21の物語にはそれぞれかなり長めの前書きがついており、物語の中心メッセージが要約されている。めばしいものを列挙すると、大量飲酒をしても罰せられないと豪語する無神論者の存在(“I Am Afraid There Is a God!”)、禁酒運動家を「党派的」と呼んで非難する者たちの誤謬(“A Sectarian Thing”)、古典作品でワインが礼賛されていることが若者を惑わしている事実(“Right Opposite”)、アイリッシュ移民の多くが酒害に苦しんでいる事例(“An Irish Heart”)や、海難事故の多くが船員の飲酒に起因していること(“Life Preserver”)、酒の恐ろしさは性

別年齢に関係なくだれもが標的となる現実（“Stage-Coach”）、もはや法的解決しか残されていないとする意見（“What a Curse”）など多岐にわたるテーマが取扱われている。

そのような前書きの存在は、純粹にストーリーを楽しむとする読者を一定の結論に誘導する主張となり、物語を読んでいると、そのサブリミナルな効果もあって、まるで説教を聞かされているかのようだ。“What A Curse” “Stage-Coach”などで女性の大量飲酒の問題を作品化した先駆性と多様な酒害のありように目配りした射程の大きさは認めねばならないものの、文学に寄せてことを判断した場合、物語自身の面白さというより、前書きに凝縮されているメッセージを伝えるために物語が利用されている印象が強い。要するにサージェントはストーリーテラーではなく、イデオログであったということではないか。物語創造の根本に人間（関係）に対する関心があるとするなら、サージェントにはその要素が希薄だったと思われる。ことに長編フィクション創造に人間関係をドラマ化する力、すなわち構成力が必須だとすると、その点においても、サージェントには欠ける部分があったのであり、したがって長編を書くことができなかったのではないだろうか。

そのことはアーサーと比較してみれば分かりやすい。アーサーについては、すでに別のところで詳細な分析をおこなったので（『ボトルと涙』）、ここでは結論だけ述べておくと、要はアーサーが無類のストーリーテラーだったということに尽きる。しかも、彼は、共依存、インフルエンサー、個人と環境といった多彩なモチーフを駆使してドラマティックな作品を多数残している。そのことは、作品の多くが会話部分で構成されていること、つまり、物語が演劇的構成をベースにしていることに顕著である。代表作『酒場での十夜』がいまだに全米中の素人劇団を中心に上演され続けていることも故なしとしない。対するにサージェントの短編では会話が少なく、やや文語調のかたい地の文が中心である。彼が残した作品の多くが評伝やエッセイの類であるのも、彼の文体との親和性が物語ではなく、ノンフィクションにあったことに作家自身が自覚的であったということかもしれない。

そのことを、別の角度から検証してみよう。『禁酒物語集』の21の物語のうち、人名が題名につく作品は五つある。読者は、当然ながら、当該人物の物語が一貫して展開されるものとの期待を抱く。だが、実際はどうか。たとえば、「ナンシー・ル・バロン」（“Nancy Le Baron”）では、都会で成功した語り手が久しぶりに故郷に帰り、昔好きだったナンシーの消息を尋ねると、彼女は結婚後、酒浸りの夫に虐待されたあげく夫と死に別れたのち不幸なままひっそりと亡くなったことを知る。ナンシーの身の上を語り手が人から聞いて物語するという体裁で、肝心のナンシーは物語の前面に登場することがない。夫婦間のドラマが描かれることがないまま、酒による夫婦生活の破綻の事実のみが読者に伝えられるのである。

「キティ・グラフトン」（“Kitty Grafton”）も同様だ。幸せな結婚をしたはずのキティだが、酒が原因で夫婦の仲は壊れる。夫の事故死で一時的な解放感を味わったものの、キティは心を

閉ざし生ける屍と化す。家を出た長男が東部で成功し、帰郷後、弟たちの面倒をみるも、母親のキティは「いずれ、みな酔いどれの道をたどる」(Vol.II, 47)と絶望地獄から逃れられない。前半は不幸な生活に必死で耐える妻としてそれなりの存在感を見せていたキティだが、後半は長男の物語の影に隠れて存在感はきわめて希薄である。人生に疲れ切ったキティの影が薄いのは当然とはいうものの、物語はあくまで「グラフトン家」の物語であり、キティはドラマの中心人物とは到底言えず、いささか羊頭狗肉のタイトルだとの感が否めない。

あるいは「やんちゃなディックとお上品なロビン」(“Wild Dick and Good Little Robin”)にしても、タイトルには二人の男子の名が併記されているところから、酒をめぐる二人の人生が対比的に語られるものだという予測に自然と誘われる。ところが、物語はもっぱらディックの放蕩と立ち直りの半生が描かれ、最後にはハッピー・エンディングが待っており、その間、ロビンの話が語られることはない。いったい、このような題名と語りの齟齬はどこから生じているのか。

T.S. アーサーは、偶然にもサージェントと同じ数の21の短編を集めた『禁酒物語集』を1844年に出版しているが、登場人物がタイトルとなっている作品、たとえば、「ジム・ブラドックの誓い」(“Jim Bradock's Pledge”)は、ジムが懇願する妻の為に自らの意志で禁酒を断行しようとして失敗、結局、禁酒の誓いに署名し、酒の桎梏から抜け出ること成功する物語だが、焦点は一貫してジムに当たり、自由意志と禁酒の誓いを巡る主人公の葛藤のドラマが展開している。他の短編でも、タイトルと登場人物、主題のあいだにぶれはない。アーサーとサージェントの禁酒物語の差異の鍵となるのは、やはり、両者の物語に対する姿勢ではないか。両者の差をしいて表現すれば、禁酒物語の「物語」にアーサーが傾注した一方で、サージェントは「禁酒」に特化したとも言えよう。つまり、物語の一貫性、面白さは多少犠牲にしても、禁酒のメッセージを前面に打ち出すことが大事だとサージェントが考えていた印象が強い。そのため、彼は長編物語を書けなかったということになり、それが本論冒頭の疑問に対する一つの解答になっているように思う。

『禁酒物語集』でもっとも長く中編と言っている“*The Stage-Coach*”は、駅馬車に乗り合わせた乗客が自らの飲酒体験を順に語る文字どおりオムニバス形式の作品だが、サージェントは“*As a Medicine*”、“*The Temperance Meeting in Tattertown*”においても、この手法を用いている。短いエピソードを集めることで緩やかなまとまりを生み出すこの形式は、首尾一貫した構成力の欠如という、長編には適さない自らの欠点を半ば自覚し、それを克服するための工夫だと取れなくもない。ちなみに、アーサーの短篇集でオムニバス形式が採用されている例はない

しかし、その禁酒テーマの扱いについても問題はないだろうか。禁酒物語の定番のモチーフ

である「禁酒の誓い」(temperance pledge)を、むろん、両者とも多くの作品で描いている。禁酒の誓いは神への誓いでもあり、自由意志との絡みもあって、逡巡する主人公の心のドラマはまさに物語を盛り上げる格好の題材を提供しており、ことに、アーサーは、先ほどふれた短編をはじめ、長編においても、その作品化を得意にしていた作家である。しかるに、サージェントの場合は扱いが単純で、禁酒の誓いが劇的な展開の契機となる場面は少ない。話を具体化するため、『禁酒物語集』の中でもっとも有名な「母の金の指輪」(“My Mother's Gold Ring”)を材料にその点をさらに検討してみたい。

この作品は六年間の幸せな新婚時代の後、酒害による不幸な二年間の苦勞、そして夫の改心を経て幸せを取り戻した三年間の計11年間の妻の視点から回想する形で物語が進み、サージェントの作品の中では比較的、物語としての一貫性が保たれた作品である。しかも、酒をめぐる聖職者の偽善、良き隣人の介入など、アーサー作品でも見かけのお膳立てがそろっており、素直にストーリーが楽しめる結果となっている。前半部分の妻は「道を踏み外したかわいそうな夫」(6)を支えるべく奮闘する「耐婚」(『ボトルと涙』第12章)物語の主人公である。夫の酒問題を「それとなく」(in a mild way, Vol.I, 6)話し合い、夫の仕事中には、酒場の主人に酒を売らないでほしいと懇願、「私たちは若いからやりなおせる」(9)と夫を励まし続ける彼女は、「家庭を守るのが妻の義務だ」(7)という信念を捨てず、「心の底から神への祈りを捨てることはない」(6)。

そんな妻のはげましとよき隣人の支えもあって、夫が酒害から脱する顛末を描いた部分が作品後半である。夫は何とか自らの意志で酒を半年間断つ。禁酒の誓いに署名してはどうかという隣人の勧めに対して、夫はさらに半年そのまま禁酒が継続できた暁に誓いにサインすると言う。そして、その間、自分を支えるために、妻が母親からもらった金の指輪を貸してほしい、それを誓いの代りとして頑張りたいと言うのである。作品タイトルの由来である。こうまとめると物語としての体裁はいちおうできている印象だが、不可解な点も散見される。いったい、なぜ妻の母親の形見の指輪が禁酒の断行を後押しできるのか。妻が大事にしている品であるから、妻への禁酒の誓いを思い起こさせてくれるというのでは説得力に欠けよう。つまり、作品のタイトルとして作品全体の象徴たるべき指輪が、そもそも必然性を欠いていると言わざるを得ないのだ。

作品後半では、妻の一人称語りはかろうじて保持されているものの視点的人物は夫に移っている。彼は、自分が指輪を借りたのは、それが「私に力を新たに与え、神に対する義務、妻や子供たち、社会に対する義務を思い起こさせてくれる」(12)からだと言う。前半部で妻が述べた家庭を守る義務に呼応して、後半部では夫の義務が言及され、被害者としての妻の物語から、加害者としての夫の物語にすり替わっているのである。たしかに、題名の「母の金の指輪」の原題、“My Mother's Gold Ring”は強弁すれば、妻の母親の指輪とも、夫の(義理の)母親

の指輪とも取れなくはない。しかし、前者の場合、夫の物語と「私の母」で示唆される妻の視点にずれが生じるという不自然さが残り、後者の場合も、前半部の妻の物語と「私の（義理の）母」で示される夫の視点との混乱は避けられない。もし前半と後半で「私の」が意味するところが違うというのでは、それこそあまりにご都合主義的解釈でしかないだろう。

しかも、さらに大きな問題が潜んでいる。作品終わり近く、夫の決意の固さに喜ぶ妻の姿に言及した場面に次の記述が見られる。「悔い改めた罪びとに対する喜びが天上にあるなら、道に迷い、その後助けられた夫に対する忠実な妻の喜びも同様である」（11）。「忠実な妻」（a faithful wife）などという言葉は妻自身が発しているとは思えないし、それまで“my husband”と呼んできた妻が、ここでは“a husband”と一般論を展開している。ここには明らかに作者の闖入が感じられる。妻の一人称語りによるあくまで妻の物語で始まったこの短編が、終盤になって夫の物語に変質するにつれ、いつの間にか全知の客観視点が入り込んでいるのである。

すでにふれたように、禁酒の誓いはある意味、神に禁酒を誓う行為であり、神の力に頼る他力本願であろう。したがって人間の自由意志を信じる立場からは素直に受け入れられないことも故なしとしない。その点をアーサーは繰り返し作品中で描いており、それが彼の作品に陰影を与える要素ともなっている。他方、サージェント作品を考えると、「母の金の指輪」においては、夫はまず自らの意志で禁酒を実行しようとし（自力）、それから指輪に助けを求め、最後に禁酒の誓いを立てる（他力）。指輪は自力から他力に至る中間的介入物であるが、それに関し作品中には何の説明もなく、その実体は不明である。妻の方は酒販売をやめさせようとするなど現実的処置を模索する面があるとはいうものの、概して神への祈りを忘れない他力に頼る立場が基本にある。しかるに夫の態度にはおれがあり、もしサージェントが、自力と他力の狭間で悩む夫の心の奥底を徹底的に追求していれば、アーサー同様にドラマティックな物語が描けたかもしれない。ところが、結局、サージェントはその道を選ばず、「母の金の指輪」なる曖昧模糊とした舞台装置でお茶を濁してしまったというのがこの物語の本質なのだ。

サージェントのもう一つの特徴は、その口調の激しさである。たとえば、すでにふれたケイレブ・ステットソンへの手紙において、飲酒あるいは節酒を勧める人間を彼が非難するのは当然だが、その言葉遣いは手厳しい。「だれの目にも誤り（manifestly mistaken）」、「荒唐無稽でまったくの虚偽（preposterously and utterly false）」（46）や「不当で弁解の余地ない発言（unauthorized and unjustifiable remarks）」（49）といった言葉には、サージェントの攻撃的な性格がかいま見られる。あるいは、言葉遣いこそ過激さは控えられているが、聖職者への批判に満ちた作品が『ソロモン・スピットル牧師の日記』（*Diary of Rev. Solomon Spittle*, 1847）である。この作品は、タバコ依存症者の牧師を揶揄した戯作だが、牧師は、嗜みタバコ

の嗜癖が原因で口が黒く変色、おまけにタバコ臭さから信徒に敬遠されるありさまだ。日に日に批判が高まる様子を彼は日記に克明に記録していくのだが、むろん、その際、タバコが大量に消費されることは言うまでもない。ついに、有力な信徒が亡くなった際、葬儀への臨席を拒否され、寺男にまで辞職を迫られるに至って、彼は「神のよき創造物 (the good creatures of God)」(51) たるタバコが自由に満喫できる地を求めて立ち去る決意をするのである。ここにある「神のよき創造物」という言葉は、植民地時代の指導者の一人、インクリース・マザー (Increase Mather) の酒を評した有名な言葉「神のよき創造物 (a good creature of God)」(ロラボー、30) を想起させ、サージェントが背後にアルコール依存を意識していたことを物語っている。同様に、『禁酒物語集』の“Margaret’s Bridal”に登場する牧師は「発酵は神の御業、蒸留は人の業」(Vol.II, 255) と豪語し醸造酒を勧めている。その他、大量飲酒者の医者と結婚して惨めな生活を強いられる女性の話 (“Nancy Le Baron”) や、医者が激務から逃避するため酒に救いを求めるケースが多いこと (“Nancy Le Baron”)、聖職者の間にいかに酒害が広がっているか (“Kitty Grafton”)、等々、聖職者や医者、およびリベラル思想家のあいだに見られる大量飲酒者の偽善が次々に暴かれている。

では、そうしたサージェントの権威者による偽善に対する挑戦的なスタイルの源はどこにあるのだろうか。ハーヴァード時代の学友による伝記『ルシアス・マンリウス・サージェントの思い出』(*Reminiscences of Lucius Manlius Sargent*, 1871) によると、彼は教師たちを堂々とからかう、反骨精神が旺盛な学生だったという (11)。また、食堂で提供される食事のまずさに抗議し、それが原因で学生生活をあきらめざるをえなかったという逸話も残っている。学生時代のサージェントはラテン語の才能がめざましかったようで (11)、彼をアメリカ古典主義運動のパイオニアだと評価する見方もある (マクファーレン、252)。サージェントは、早い時期から雑誌にラテン語で詩を投稿するなどの活動をするかたわらラテン文学の紹介に勤しんだが、彼はヴァーゼルなどメジャーな詩人をさけ、あえて知名度の低いラテン詩人の作品の翻訳・紹介に傾注したものの、結局、翻訳出版の計画は実を結ばなかったという (マクファーレン、262-4)。この事例もサージェントの反骨精神の表れの一つだと言えなくもない。

反対に、サージェントにとって理想像がなかったかということ、そうではない。サージェントの筆になる『サミュエル・デクスターの思い出』(*Reminiscences of Samuel Dexter*, 1857) は、恩師の学者弁護士サミュエル・デクスターへの敬愛に満ちた書だが、根本にその「名誉ある孤高 (honorable independence)」(25) への敬意がある。デクスターは権力や組織をきらい、共和党からの知事候補の打診を拒否 (92)、また、州最高裁首席判事の介入をもとめず、ある裁判で堂々と反論を展開する (57) など、反権力の姿勢を生涯貫いた人物だった。作品最後を締めくくる言葉はこうである。「その知的能力 (intellectual powers)、気高い行動規範 (lofty principles)、そして本物の愛国心 (genuine patriotism) に対し、心からの深甚なる敬意の念

(a sentiment of cordial and profound respect) を私は慈しんできた」(96)。これらの賛辞には、サージェント自身の、権威や権力を敵視する反骨精神が透けて見える。

また、彼は、イングランド国王に対して信教の自由や公平な裁判を求めた、クエーカー教徒でペンシルベニア州創設の立役者ウィリアム・ペン (William Penn) を礼賛していたようだが、そのペンを批判したからという理由で、高名な歴史家トマス・マコーレー (Thomas Macaulay) を徹底的にこきおろしている。『死者との交流 (*Dealings with the Dead*)』(1856) 第一巻で述べられたペン擁護論の議論の良し悪しはおくとして、目を引くのはその言葉遣いの激しさだ。「根拠なき批判 (groundless imputations)」(232)「しまりのない不十分な言及 (loose and unsatisfactory kind of reference)」(241) はまだいいとして、マコーレーの記述は「歴史ではなく、全くの事実誤認であり、強力かつ巧妙になされればなされるほど、故人に対するより不当で卑劣な中傷となる (This is not history, it is gross misrepresentation; and, the more forcibly and ingeniously it is fabricated, the more unjust and the more ungenerous libel)」(241) という表現にはサージェントの怒りが直截に吐露されており、物事を白黒で割り切り、いったん敵視した相手には攻撃の手を緩めないサージェントの執拗さが現れている。

そのことは、もう一つの興味深い事例にも明らかだ。サージェントは、1857年の8月を中心に、*The Boston Evening Transcript* 紙に Sigma のペンネームで投稿を繰り返し、反奴隷制運動の推進役パーカー・ピルズベリー (Parker Pillsbury) と彼の盟友で奴隷解放運動の第一人者として名高いウィリアム・ギャリソン (William Garrison) を攻撃している。事の発端はこうだ。ある日、ピルズベリーが愛犬数頭を教会に連れて入り、こともあろうに犬に対して洗礼を行ったというのである。例によってサージェントは「目撃者」の証言や、事件を報じた他紙からの引用を多数まじえ、ピルズベリーの不敬を非難する。それに対するピルズベリーからの反論、およびギャリソンの擁護記事、それに対しサージェントの反論がなされるといった具合にほぼ三日に一度の間隔で論争が続いている。どうやら、ことの真相は、ピルズベリーが実際に教会内に犬を連れて入ったのではなく、人を動物扱いする奴隷制度が許されるなら、犬を人並みに扱うことも構わないではないかという、教会の外での彼の皮肉な身振りが始まりであったようだ (8/15号)。ただし、ピルズベリーが模擬儀式を行ったのが安息日であったことが、サージェントの逆鱗にふれ、彼は、安息日を見做すピルズベリー、ギャリソンを「悪党 (rogue)」呼ばわりする (8/18号)。ギャリソンが主導した反安息日集会は、安息日なるものはキリスト教の聖職者たちが勝手に決めた人為的なもので本来のキリスト教とは関係がないと主張していて、このことが特にサージェントには気に入らなかったようだ。彼は、ギャリソンらの主張は反奴隷制運動をかえって阻害するものであって (8/22号)、ピルズベリーとギャリソンは「羊の皮をかぶった狼 (this wolf in sheep's clothing)」(8/27号) であり、刑務所に放り込まれるべきまさに「公共の敵 (public enemy)」だとまで断罪している。聖書を「見せかけの書 (fashionable

book)」（8/31号）と呼んだ革新的社会改良主義者ギャリソンの過激なレトリックに保守派キリスト教徒サージェントが嘔みついたというわけである。

話を禁酒物語に戻すと、サージェントは、アーサーとは違い、ゆれ動く人間心理の複雑さを描く姿勢は捨て、代わりに、禁酒の勧めをストレートに、時には激しい口調で打ちだした。言い換えれば、作者の影を極力消して、物語の面白さで読者を魅了するアーサーに対し、読者の受け、あるいは、物語の完成度を犠牲にしても、自身の主張を前面に打ちだしたのがサージェントだったと言っている。とりわけ、彼の場合、批判の矛先は、医師、聖職者、政治家など権力や権威を持った人物に向かい、彼らによる飲酒の勧めを憎み糾弾する姿勢が顕著だった。そんな彼を評したある論者は、サージェントを「抜きん出た有能な嫌悪者（preeminently a good hater）」（ガン、367）と言っている。『オックスフォード英語辞典』（*Oxford English Dictionary*）によると、“good hater”なる言葉は、サミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson）がバサースト（Bathurst）という名の人物を評した1784年の文章が初出である。その中でバサースト氏は「馬鹿者を嫌い、悪漢を嫌い、そしてホイッグ党員を嫌った。彼はまことによき嫌悪者であった（he hated a fool, and he hated a rogue, and he hated a whig: he was a very good hater.）」とされている。“hater”とはさまざまなものを憎む者の意であり通常ネガティブな響きを持つ言葉である。ただ“good”は有能とも善良ともとれるポジティブな言葉であり、“a good hater”は一見すると矛盾語法と見えるものの、トーリー党支持派のジョンソンにすれば、馬鹿者、悪漢と同列にホイッグ党員を敵視するバサースト氏の姿勢に喝采を送っていたともとれる。サージェントについても、バサースト氏同様、なにかと難癖をつけたがる厄介な、それでいて社会に必要な批判者だということが、この言葉で示唆されているのではないだろうか。禁酒物語を通じて禁酒運動を後押しした貢献は否定できないものの、反面、主張の激しさと物語作家としての資質については疑問視せざるをえない正負の両面をあわせ持つ特異な存在がサージェントであったと言え、“a good hater”は、まさに、サージェントの特質の言い得て妙な表現であるように思われる。

引用参考書目

- Arthur, T. S., *Temperance Tales*. Philadelphia: E. Ferrett, 1844.
- *Ten Nights in a Bar-Room, and What I Saw There*. Boston: L.R.Crown & Company, 1854.
- Bercovitch, Sacvan. (ed.) *The Cambridge History of American Literature*. New York: Cambridge UP., 1995.
- Furnas, J.C., *The Life and Times of the Late Demon Rum*. New York: P.P.Putnam's Sons, 1965.
- Gunn, Sidney, "Sargent, Lucius Manlius," *Dictionary of American Biography*, XVI, 1937.
- Hart, James. *The Popular Book: A History of America's Literary Taste*. Connecticut: Greenwood, 1950.
- Lender, Mark Edward & Martin, James Kirby. *Drinking in America*. New York, The Free Press, 1987.
- Macfarlane, Roger T.. "Classics in America's Early National Period: The Early Career of Lucius Manlius Sargent," *The Classical Journal*, Vol.93, No.3 (Feb-Mar), 1998.
- Roraubaug, W.J., *The Alcoholic Republic: An American Tradition*. New York: Oxford UP., 1979.
- Sargent, Lucius Manlius. *Letter, On The State of The Temperance Reform, To Caleb Stetson*. Boston: William S. Damrell, 1836.
- *Diary of Rev. Solomon Spittle*. Boston: George A. Cortis, 1847.
- *The Temperance Tales: New Illustrated Edition*. Boston: John P. Jewett & Co., 1852.
- *Dealings with the Dead, Vol.I*. Boston: Dutton and Wentworth, 1856.
- *Reminiscences of Samuel Dexter*: Originally Written for the Boston Evening Transcript. Boston: A. Williams & Co., 1857.
- *The Ballad of The Abolition Blunder-Buss*. Boston: The Booksellers, 1861.
- Sheppard, John Hannibal, *Reminiscences of Lucius Manlius Sargent*. Boston: David Clapps & Son, 1871.
- The Boston Evening Transcript*. Boston: The Boston Transcript Company, 1857.
- 森岡裕一『ボトルと涙—19世紀アメリカ禁酒物語論』金星堂, 2021.

(もりおか・ゆういち 国際文化研究所研究員)